

要旨

研究目的

初めて死産のケアに従事する助産師の体験を構造化し、記述すること。これにより、初めて死産のケアに従事する助産師に必要な準備とサポートに示唆を得ること。

研究方法

質的記述的研究。卒後 2 年目以降の助産師で、死産のケアに従事した経験が複数回ある 9 名を研究対象とし、半構成的インタビューを実施。

研究結果

本研究協力者が初めて死産のケアに従事したのは、現在勤務している産科病棟に配属された 1 年目の 9 月から 2 年目の終わりであり、いずれも分娩期のケアを行っていた。

初めて死産のケアに従事する際、研究協力者たちは、死産のケアに対する【心構え】をしていた者とそうでない者、実践に繋がる【学習経験】があった者とそうでない者に分かれた。このレディネスの違いにかかわらず、実際にケアを行う前は、協力者全員が【不安と恐怖】の感情を抱いていた。そして、ケアの最中には、分娩介助と同時に母親の心理的ケアを行わなければならない、初めての死産の分娩介助ゆえの進行の予測の難しさ、どのように母親をケアしたらよいか分からないという困惑、死産に対する悲しみや児の死を看取る辛さという、【多重の課題と感情】を抱いていた。これらは協力者たちに共通するものであったが、ケア実施後には、【悶々とする】体験をした者と、【安堵する】体験をした者に分かれた。この違いの要因は、ケア実施中の【ロールモデルの存在】、ケア実施後の【周囲のサポート】と、ケアを通しての【ケア対象者の声】であった。研究協力者たちは、【ケア対象者の声】を【母児を尊重した関わり】を通して得ていたが、この関わりはレディネスとして実践に繋がる学習経験があり、母児を尊重したケアの重要性の【認識】を持っていたことや、ロールモデルに学ぶことで促されていた。

また初めての死産のケアの経験から、協力者たちは、ケアを行う自身の態度への示唆、母児を主体においたケアの重要性、自身のケアの必要性についての【学び】を得ていた。

結論

初めて死産のケアに従事する助産師は、初心者ならではの多くの課題と感情を持ちながらケアに臨む。ロールモデルの存在、周囲のサポート、ケア対象者の声は、その体験に影響を及ぼす重要な要素である。初めて死産のケアに従事する助産師には、組織全体においてのサポートの提供と、母親のいきた体験に触れる基礎教育が必要である。